

# I 個が生きる授業の評価

## — 自己を高める評価力の育成 —

副校長 大橋 忠正

### 1. 評価から目標を見る

平成元年（1989）3月の新学習指導要領告示のあと、平成3年（1991）3月に指導要録の改訂が行われた。その間とそれ以後の教育雑誌などでの特集テーマや主な論文テーマを見ると、次のような傾向に気付く。

『初等教育資料』（東洋館出版社）によると、平成元年4月から平成3年3月までは「教育課程の創造」、「教育課程の創造的展開」であったが、指導要録改訂以後の平成3年7月号からは、「子どものよさを生かす学習指導と評価」、「子どもの豊かな表現力を育てる」など、子供を主体にした表現が多く見られるようになっている。平成4年度の年間テーマは、「よさを生かす教育の実現」である。

これは学習指導要領の趣旨が指導要録の改訂によってより鮮明になり、論議が活発になってきた表れと見ることができる。指導と評価の一体化。評価を考えることで目標が明確になり、その深化が図られていることを示している。

本校の教育研究も同様である。昨年度から「個が生きる授業の評価」を研究テーマにすることで、それ以前のテーマ「個が生きる授業」の研究を見直している。今年度からは、「自己を高める評価力の育成」が副題である。更なる深化を目指している。

### 2. 自己教育力と自己を高める評価力

個が生きる授業でねらう個が生きる学力とは、自己教育力をいう。ここで自己教育力と自己学習力の相違点を整理しておく。川野辺氏は、「陶冶」と「訓育」の用語を用いて、「自己教育力とは、自己陶冶と自己訓育の統合である」と説明している。1) 陶冶とは、教師が子供にはたらきかけて知識や技能の形成を図る教育作用、訓育とは、人間の意志、感情、世界観などの性格形成をねらう教育作用をいう。

上寺氏は、「自己学習」は自分自身でものごとを学び、身につける行動、「自己教育」は自ら望ましい価値を選び、その価値を目指して自己形成することであるという。「自己教育力とは、自ら求める望ましい価値を目指して、それを可能にすることがらを学んで自己を改造していく力」とも表現している。2)

中央教育審議会教育内容等小委員会の「審議経過報告」（昭和58年11月）で指摘された自己教育力の概念の具体的な意味内容として、1 学習意欲と意志の形成、2 学習の仕方の習得、3 生き方の探求の3点があるが、両氏の説明から、生き方の探求があるところが自己教育力の概念の特徴であるということが出来る。

さて、自己教育力と自己を高める評価力は表裏の関係にある。自己を高めるとは、自己の学習意欲、学び方、生き方を高めることである。この自己評価力を子供に育成することで、授業における子供の学習活動は、いっそう主体的になり、自己教育力の育成に役立つと考える。授業の中で学習意欲が高まったか、学び方が新たに身についたか、自己のよさを生かし、他者と共によりよく生きる生き方が志向されたかを自ら評価できるようになることがこれからの子供には特に求められている。

### 3. 自己を高める評価力の育成

#### (1) 自己を高める評価力が育つ授業構成

自己を高める評価力が育つ授業構成はどのようなものであればよいか。本校では、これまで個が生きる授業の学習過程として、課題解決学習を考えてきた。<sup>3)</sup> この学習過程に自己評価活動を織り込むことで、自己を高める評価力が育つ授業は成立する。具体的には、次の評価活動を取り入れる。

- ① 一人一人は、自己のめあてを設定（把握）することができたか。
- ② 一人一人は、学習のめあてを能動的に追求することができたか。
- ③ 一人一人は、学習のめあてに照らして自己をふりかえり、新たなめあての設定や活動につなげていくことができたか。

課題解決学習では、1 学習課題の把握、2 学習課題解決の方法と見通し、3 学習課題解決の活動、4 学習活動のまとめと次時の学習問題の発見の学習プロセスがある。これが教師主導の学習結果重視の課題解決学習とならないように、1、2の学習活動には①の、3の学習活動には②の、4の学習活動には③の自己評価活動を仕込むのである。このことで、子供主導の学習過程重視の課題解決学習は成立し、自己を高める評価力は育成されると考える。

#### (2) 自己を高める評価の在り方

##### ア 自己を高める評価力育成のねらい

自己を高める評価力の育成は、自己教育力育成のためにある。それは子供のよさや可能性を第一に考え、学習意欲、学び方、生き方の高まりをねらって行われるものである。自己教育力の評価は、その概念の特性から見て自己評価が最も適当である。自己教育力に自己評価力も含めてとらえている研究実践もある。

学習意欲、学び方の習得、生き方の探究は、いずれも自律的な行為において可能である。他律的で自主性の乏しい人間、受動的で型にはまった考え方ができない人間の教育は、評価方法から見ると教師中心の過多にその一因があるといわれている。自己評価活動によって自己教育の根幹をなす自律性、自己統制能力はいっそう強化されると思われる。

##### イ 自己を高める評価の観点

授業における自己を高める評価の観点とは、指導要録で示されている評価がそれに当たる。各教科で育成される「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」の4観点の学力は、自己教育力の基盤をなすものである。「関心・意欲・態度」は『学習意欲』に関する観点であり、あとの3観点は『学び方の習得』に関連し、学習結果として得られた「知識・理解」は、教科でねらわれている「関心・意欲・態度」の中の態度目標に発展し、『生き方』にかかわる力となる。

したがって、子供も、各授業においては、この4観点の学習状況を自ら評価する必要がある。

##### ウ 自己を高める評価活動

イの自己を高める評価の観点を充足させるには、子供は授業の中でどうあればよいか。それは前記のとおり、次のような評価活動を学習活動とともに行うことである。自己のめあてを把握し、学習方法と学習の見通しをもつことができたか、能動的な学習を行っているか、学習結果のふりかえりと次時の学習問題の発見ができたかの自己評価活動である。

このように導入、展開、終末時に自己を見つめる評価活動を取り入れることにより、学習活動はいっそう主体的、自律的になる。すると、個に応じた能力と理解力がよく育ち、自己実現に向けての意欲や態度が促進されてくる。

評価活動によって学習が活性化されてくると考えてよい。評価のねらいは子供の学習の改善と人間形成の向上にある。それを意志するのは他ならぬ子供であるとする、教師評価に対して自己評

価が最も直接的に影響を及ぼすことになる。自己を高める評価の観点にかかわる学習活動も、その内側から充足されてくると考えてよい。

#### エ 自己を高める評価の学習

自己を高める評価活動には、その評価活動の仕方とそれに値する学び方の学習が必要である。学習のめあてを自ら設定できる学び方と評価の仕方、学習のめあて達成のための手順、方法を自ら考え出せる学び方と評価の仕方、能動的に課題を追求していける学び方と評価の仕方、学習結果のふりかえりと次時の学習への取り組みができる学び方と評価の仕方である。

しかも、この学び方と自己評価の学習では、教科、領域において、学年段階で計画的に積み上げていく指導計画が必要である。近年、自己評価活動の意義は話題になりながらも、自己評価力育成の指導計画に基づく計画的な実践研究は未だ少ない。本校はその実践研究を目指している。

### 4. 自己を高める評価力が育つ授業と評価の工夫

#### (1) めあて意識がもてる授業と評価

自己を高める評価力が育つ授業構成には、学習課題の把握と学習課題解決の方法と見通しをもつ活動が重要である。9月、11月、12月、2月の授業研究でもこの段階の授業研究がよく行われた。

家庭科では、袋づくりは縫い代とゆりみを考えて布の大きさを決める必要があることをねらった授業があった。教師は裁縫箱にぴったりの自作の袋を示し、「箱を入れると、どうしてこんなにきつくなるのか」という問いを発した。子供が問題を見つけ、課題をつかむ学習活動の設定としては、よく工夫されている。ただ、もう少し、子供がじっくりと実物にふれ、袋の立体感とそれを解いた平面の状態を観察する時間と活動の場が用意できると、さらによくめあて意識をもつことができたようである。このような子供の側に立つ授業改善の手だての協議が、他教科でも具体的に行われている。

体育科では、「学習のしかたカード」についての取り組みを進めている。

レベル1 めあてをもって取り組むことができなかった。

レベル2 めあてをもって取り組むことができた。

レベル3 めあての解決のしかたを考えることができた。

レベル4 友達と話し合っ練習をすることができた。

レベル5 めあてのできばえをふりかえり、新しいめあてがもてる。

レベル1からレベル3までが、この場合めあて意識に関する評価である。

#### (2) 能動的な追求学習

子供が能動的な追求学習を行う工夫として、次の3点がある。

##### ア 自己課題に基づく学習活動

自己課題に基づく学習活動を行う場合、自分で学習課題と学習の見通しはもてても、実際に追求学習を行う段階でとまどう子供がいる。教師は、一人一人の子供と向きあってはそのつまずきを見つけ、個に応じる指導、援助をしなくてはならない。

その際、教師は子供の心身が硬直しない自由度のある学級の雰囲気づくりにも心がけたい。子供が自分のよさを生かして、創造的に心豊かに自己課題に基づく学習を進めるには、子供の心理的安定が基盤である。

算数科では、自力解決の自己評価基準として次の尺度がある。

レベル1 前時までの学習を参考にどう取り組むか計画が立てられる。

レベル2 自分の考えをもつことができる。

レベル3 自分の考えの説明ができる。

レベル4 自分の考えが2つ以上もてる。

算数科には解き方、規則性、性質の発見などのめあてがあるが、それを自己課題として解決していく学習過程上の評価例である。

#### イ 主体的思考、判断、表現を取り入れる学習活動

能動的な追求学習には、主体的思考、判断、表現活動が欠かせない。思考活動と表現活動は対をなすものであり、思考によって表現が、表現によって思考が深められていく。

1年生国語では、老犬「エルフ」に対するぼくの気持ちを想像し、話したり、書いたり、音読したりすることができるようになる授業であった。「寝る前に、エルフに話しかけるぼくになって書きましょう」という問いで、ふき出しに書かせる活動が行われた。子供は、主人公に同化しながら主体的な読みを表現する活動を楽しんでいた。

#### ウ 互いのよさが生かせる学習活動

子供は自分のよさを発揮する場や機会を得ると意欲的になり、自分らしさ、友達らしさをつくり上げる活動を進んで行うようになる。そのためには、他からの受容、承認、賞賛の活動を積極的に取り入れていきたい。

体育の開脚前転のグループに分かれての学習では、「わかった、できたこと」「教え合ったこと」「次のめあて」を観点とした評価活動があった。K児は、「足を開くのがおそすぎてもいけないことがわかった」、「O君にもう少し早く手をついた方がいいと教えてあげた」、「ぼくは次にもう少しきれいにできるといい」と記録用紙に記入していた。

### (3) 自己のふりかえりと新たな課題の発見の学習

自己のふりかえりと新たな課題の発見を促す学習では、主体的な学びを確かめる活動を重点にしたい。自己課題に照らして学んだこと、わかったことをふりかえらせ、次時の課題を見つける活動を行うことである。

算数の授業。自らふりかえる場の自由記述の活動では、次のようなノートがあった。A児「①の考えが一番いいし、いろいろなときに使える。どんどん使いたい。」B児「たくさんの計算のやり方ができたのでよくわかった。③のやり方がやりやすかったので今度の授業で役立てたい。」解き方の思考過程には個人差があり、次時への取り組みには共通に意欲があることが評価できる。

### (4) 道徳の時間の評価

道徳の時間の子供の評価は、行動、態度、発言から行うことができる。具体的には、授業への真剣さ、主体的参加、他者受容、価値の主体的自覚の活動などが考えられる。これらの観点の評価は、子供にも積極的に行わせる必要がある。自己を高める評価力は、道徳の時間においても育成されなくてはならない。

自己を高める評価活動として本校で考えた三点は、道徳の時間では次のような扱いが考えられる。

① 一人一人は、自己のめあてを設定（把握）することができたかについては、授業への真剣さが考えられる。教科の授業とちがって、道徳の時間のめあて把握は、導入段階では難しく、授業全体を通して把握されていくものであるから、終始、真剣な態度であることが求められる。

② 一人一人は、学習のめあてを能動的に追求することができたかについては、主体的な参加と他者受容の度合いが考えられる。自分と深く対話をしながら発言したり、友達の発言に学んだり、またその発言から自分の考えを深めたりする活動は能動的な追求活動そのものである。

③ 一人一人は、学習のめあてに照らして自己をふりかえり、新たなめあての設定や活動につなげていくことができたかについては、価値の主体的な自覚の度合いが考えられる。その時間ねらわれた道徳的価値が自分の中で大切なものとして自覚されると、それは自ずとその後の生き方や行動の源としての力になる。道徳的実践力であり、安彦氏の表現を借りれば、「生き方にかかわる活動の根にある部分」の成長である。

以上の道徳の時間における自己を高める評価活動は、一人一人の子供が自らのよさに気づき、それを伸ばすための活動でなくてはならない。

## 5. まとめ

自己を高める評価力の育成では、子供の学習状況で比較的とらえやすい学習意欲や学び方の取り上げのみに終わってはならない。安彦氏は、活動の根にある隠れた部分（1物の見方、考え方、2性質、性格、3自分の姿勢・心構え、4自分の価値意識・価値体系）を自ら評価していくことこそ自己教育力の要の部分の自己評価であるという。<sup>4)</sup> これは生き方にかかわる評価の指摘である。

子どもの生き方にかかわる活動の根は、内在していることが多く、その見とりは難しい。しかし、教師はそれに迫り、自己評価を促す糸口を見つけ、支援する必要がある。そのためには、子供に対する教師の半身の姿勢は許されない。子供一人一人に深くかかわろうとする教師の積極的な生き方が求められてくる。

注1) 川野辺 敏「自己教育力を考える」『教育けんきゅう』広島県立教育センター、1986, No14, 4頁～5頁

2) 上寺久雄「自己教育力の育成について」『学校教育』広島大学附属小学校、1992. 8, 6頁～8頁

3) 広島大学附属東雲小学校『個が生きる授業』平成3年, 20頁

4) 本校校内研修の席上, 安彦忠彦氏(名古屋大学)の発言による。平成4年8月19日